

## 経営寺子屋第8回 粕谷 誠、東京大学経済学部教授 「財閥の歴史とその意義」

2015年3月18日

MCNと創発倶楽部が共催する経営寺子屋第8回は3月18日、Platform 南青山に東京大学経済学部教授の粕谷誠氏をお招きし、江戸時代の創業から今日に至る財閥の経緯について、三井、住友を柱にお話いただいた後、参加者との質疑応答を行った。その要旨は以下の通り。

財閥化現象は日本に限らず発展途上国にもよくみられ、市場経済の不完全性を補うが、その性格上政府とのコネが発生しやすい。また成長過程で範囲の経済が機能する一方で、少数株主からの収奪が起きる可能性もある。



明治期の財閥は、新興企業家、旧大名、横浜貿易商、江戸時代の豪商に分類されるが、三井や住友などの生き残り組はむしろ少数といえる。



三井は呉服業と両替業、住友は鉱山業、精錬業と両替業によって栄えたが、ともに明治初期の苦難を乗り切り、旧来の事業の整理や新しい事業への取り組みによって発展を遂げていった。その後の戦間期には、それぞれ持株会社を設立し、戦時期には株式会社化したが、三井の方は株式公開に至った。

第二次大戦後は財閥解体に従い、本社を解散、役員も退任したが、株の相互持ち合いによる経営権の維持や銀行の系列融資などによって企業集団として再生し、高度成長の波に乗って再び発展して行った。

その流れを大きく転換させたのはバブル崩壊であり、株式持ち合いの弛緩とメガバンクの登場によって企業集団は大きくその姿を変え、今日に至っている。

(以上)